

第4章 考古学的調査による成果

1 調査の方法

(1) 基本方針

今回の調査は、当初より3年間という期間と、ほぼ定められた予算が割り当てられており、当然のことながらこの期間と予算の中で具体的な計画を立案することとなった。調査の目標とした十三湊遺跡・福島城跡はいずれもきわめて規模の大きな遺跡であり、遺跡の大部分を発掘するということは当初から不可能であった。

こうした制約の中でわれわれは調査の課題を以下のように絞り込むこととした。つまり十三湊遺跡に関しては都市遺跡研究の基礎となる都市構造の基本プランをつかむことに、また福島城跡については考古学的には確定されていなかった築造年代をさぐることである。このうち、本調査の特徴は、十三湊遺跡の場合に特に明瞭であるので、以下その点を詳述したい。

十三湊遺跡の調査においては先述のように都市プランの提示を課題として選定したが、それは都市遺跡研究を進める上で都市プランの全体像を仮説的ではあってもまず提示することが、きわめて重要だと考えたためである。その課題を達成するために古い学問区分でいえば、歴史地理学的手法を考古学的な調査成果と合わせて活用することをわれわれは全面的に実践することとした。それはこの調査の最大の特色といえるであろう。従来の中世都市の発掘調査においては、調査当初から都市の全体像を念頭において、個々の調査区の発掘が進められることはまれであり、考古学者の関心も調査区の発掘情報に限定されがちであった。

もとより発掘調査で明らかになった遺構・遺物の分析は可能な限り深めるべきであるが、個々の遺構・遺物を個別・微細に捉えるだけでなく、都市遺跡としての空間的な視点の中で、それぞれをある都市生活を構成していた要素の一部と位置づけてまとめ、様式的に評価していかなくてはならない。

そのためには絵図・地籍図・空中写真からの分析をまず行った上で考古学的な調査に臨み、発掘の成果をそれらの分析成果にフィードバックさせながら、さらに調査結果の読み取りを深化させるといった手順を踏むことが必要になる。十三湊遺跡は15世紀をピークとした都市建設の後、中世の都市域の中心部が耕地化されて今日を迎えており、絵図・地籍図・空中写真の判読の精度を阻害するノイズ、あるいは考古学的な遺構の重複が少なく、こうした学際的な都市遺跡調査を行うには最も適した遺跡であった。

都市遺跡の全体像を仮説的に提示しながら考古学的な調査を進めていくことは、研究的に有効であるばかりでなく、都市再開発の厳しい制約の中で進められている、各地の都市遺跡の緊急発

掘を効率よく進め、重要な地点をよりの確に保護していくためにも有効だと思われる。調査区内で発見された諸遺構・遺物は都市の全体像を念頭に常に評価が試みられるだけでなく、建物内・屋敷地内・街区や屋敷地群といった周辺の状況などのさまざまな空間レベルから評価される。

別言すれば、あたりまえのことではあるがそうした空間を常に意識した時期別の諸遺構・遺物の組み合わせを様式的に捉えて、はじめて個々のデータが持った意味を再構成することができるのである。こうした場合にいわゆる発掘調査だけを想定した調査では、広い範囲を発掘しなければ、そうした検討や評価を実現することはできないが、絵図・地籍図・空中写真といった資料の分析成果を統合することができれば、一定の精度で復元的な評価が可能になる。

もとよりそれらの資料精度には粗密があり、考古学的な発掘成果と同精度に扱うことはできない。しかし点的ではあっても典型的な発掘調査地点の知見と相互検証することによって充分信頼できる精度まで、絵図・地図・航空写真資料の読み取りを高めることができる。ただし本報告の第3章で小島が詳説するように、絵図・地図・空中写真資料を歴史史料として変換する必要な手順が的確に行われなければ、十分な効果が得られないのは当然である。

調査に参加した小島・前川・千田は、これまでに主に戦国・織豊期の城下町遺跡においてこうした調査方法を重ねてきており、そうした都市の空間構成研究の視点による一貫した調査を十三湊遺跡において試みようとしたわけである。具体的にそうした絵図・地籍図・空中写真の判読を組み合わせながら継続的に広範囲の都市遺跡の調査を行っている例に、1989年の「清須シンポジウム」〔東海埋蔵文化財研究会 1990〕を契機にした愛知県埋蔵文化財センターによる清須城下町遺跡・朝日西遺跡の調査があげられる。

都市遺跡としての清須は中心となる時期だけでも15世紀から17世紀の初頭にわたって継続し、途中に大規模な都市プランの改造を受けているだけに、絵図や地籍図・空中写真による判読には、都市プランの最終段階が強く反映されるという限界はある。しかし都市のこういった部分が改変され、こういった部分が継承されたかなどを、考古学による発掘成果と合わせることで、地籍図などに反映されにくい部分を検討するにも、その変化をよりの確に捉えることができる。複雑な重複がある場合であっても絵図・地図・空中写真資料は「ある時と空間の断面」を映し出す手がかりとして重要だといえる。

清須では早い段階に絵図・地図・空中写真資料が活用できるように整備され、広く公開された例であり、今後、全国の都市遺跡においてもこうした情報の史料化が計画的に推進され、考古学的な調査成果と相互検証されることが待望されるのである。そうした意味で、今回の十三湊遺跡の調査の成果は、絵図・地図・空中写真資料を組み込んだ考古学的調査の大規模な実験調査であり、こうした方法による都市研究の有効性を示す証左となるものであろう。

今回の調査においてもうひとつ一貫して実施したのが、調査に参加した宇野が提唱する計量考古学の実践である。その基本的な視点については、すでに宇野が別稿で詳しく述べており、くわしくはそれに拠りたいが〔宇野 1992〕、あらゆる出土遺物を口縁部計測法による個体数復原

によって計量し、座標による2次元空間の広がりや考古学の陶磁器編年による時間の移りゆきを合わせて把握することで、都市活動の消長を考古学的に的確に把握しようとしたものである。

さらに同様の手法によって、まとまりある地域、あるいは他地域や都市・村落との比較研究を行うことで、遺跡や地域の特色や地域間交流の動態を浮き彫りにすることができるのである。

十三湊遺跡の調査では調査年次ごと、あるいは調査地点ごとなどの有効なデータの組み合わせによってすべての遺物が計量的に処理され、特色が引き出せるよう試みている。その成果は前川・榊原の論考に詳しいが、宇野自身も日本海地域の中での十三湊の位置づけを計量考古学の成果に基づいて述べている〔宇野 1994〕。

こうした遺構と遺物についてのそれぞれの基本的な方法論をもとに調査は実施された。「調査の目的と経過」でもふれたように、具体的には詳細分布調査、基本遺跡測量図の作製、試掘調査、面的な本調査といった考古学の段階的な調査活動とともに、周辺遺跡の踏査および城館遺跡の縄張り図作製、絵図・地図・空中写真資料の探索、史料化といった活動が平行して行われた。

(2) 福島城

第1章でも述べたように、福島城跡は1955年の東京大学東洋文化研究所による外郭東辺部を中心に調査が唯一の考古学的調査である。その際、市浦村役場などの協力によって福島城跡の測量図が作成され、これまで城跡の全貌を示すものとして広く流布してきた。この東京大学東洋文化研究所による調査は、外郭東辺の虎口を発見し、井戸および外郭内に構築されていた竪穴住居などを明らかにするなど大きな成果をあげている。また測量図も短期間で作成されたとは思えないほど、遺跡の要点をつかんだもので、高く評価されるものである。

しかし、先述のごとく発掘によって検出された諸遺構の年代的な位置づけは考古学的には保留されており、結果として通説的な伝承に従って決定されている。この点は、今日からみれば不充分といわざるを得ないだろう。また、そのとき、そうした結論を補強するものとして比較され、共通すると結論されたチャシや館と、福島城の構成がいかに異なっていたかということも、すでに第1章で指摘した通りである。あるいは『館址』という、東北各地域の中世城館を考古学的な成果によって通覧するという、当初の目的のために、福島城における調査成果の解釈が全体調和的になったところがあったのかもしれない。

さらに従来の測量図は遺構の概要を的確に捉えているが、縮尺が小さく細部については図化が不十分な点が認められ、国土座標に乗せられてもいない。また標高や各遺構の高さを示す端点なども不足している。すぐれた概要測量図ではあるが、やはり今日これを遺構の基本平面図として用いることは不可能といわざるを得ない。

こうした状況からわたしたちの調査では、まず福島城跡の徹底的な踏査を行い、地表面から遺構をできる限り把握することとした。さらに十三湊遺跡と合わせ城域全体の詳細分布調査を実施して、内・外郭の年代や利用の粗密を推測する基礎資料とすることを計画した。

またこうした遺跡把握をより深く行うため、航空写真測量をベースとし、的確な現地補測を加えた1/1000遺跡測量図を作成して、今回、さらには将来の調査に備えることとした。

こうした基礎的な調査をふまえ、従来から福島城の中心と目されながら未調査で、その解明が待たれていた内郭を発掘調査することが、福島城を解明するのに現在もっとも重要であると判断するに至った。そしてまず、第5章にて詳述するように、内郭の電気探査を行い、調査に先立って地下遺構の概況を検討した。

内郭の発掘調査では福島城をめぐる諸問題の中でもっとも大きな課題であった築造年代を明らかにするため、土塁と堀を断ち割るトレンチを設定することにした。調査の基準としたグリッドは国土座標に乗せて設定した。福島城内郭の土塁と堀は今日北辺および東辺部においてもっとも保存状況がよいことから、北辺に2トレンチ、東辺に2トレンチを適宜設定した。このうち北辺側には土塁外側に水堀があるため主に土塁構築法の把握を目的とした。

東辺側ではすでに外側の堀は埋め立てられ、地割りにわずかな痕跡を示す状況であったので、堀と土塁の具体的な関係を把握することを目的とした。このうち東辺土塁中央部の調査区は、その位置から内郭東門の存在を推定し、門跡を検出することを目標とした。

これら4つの土塁と堀の解明をめざしたトレンチの他に、電気探査で遺構状の反応があった内郭内の地点に2つのトレンチを設定した。

(3) 十三湊遺跡

十三湊遺跡ではこれまで十三小学校校舎改築にともなう小規模な発掘、十三バイパスに伴う事前調査、隠居地点（いわゆる檀林寺跡）の学術調査が行われており、それぞれに成果があげられている。ところが一般には興国元年（2年ともいう）の大津波によって十三湊は壊滅し、遺跡は残っていないという所伝がかなり信じられていた。

しかしこれまで行われてきた発掘や今回のまとめに述べるように、十三湊遺跡は全国流通に関わった中世の港湾都市としては他に例のないほど良好な保存状況であり、また単に遺跡の全体が残されているだけでなく、湖や日本海、周辺の城館や地形といった中世港湾都市十三湊を取りまいていた中世的景観そのものが完存していることに大きな意味をもつのである。

調査計画の現地予備調査の段階で、それを確信したわたしたちは、従来の調査では個別地点については解明されているものの、調査段階までの青森県遺跡分布図に端的に示されているように、個々の地点がそれぞれ別の遺跡として認識され、本来の都市全体を構成していた有機的なつながりや、都市全体の中での位置づけの視点が欠けていたことが、従来の調査の最大の問題点といわざるを得ないと判断した。

そこでわたしたちの調査では、なにより十三湊遺跡の今後の調査を進めていく上で不可欠な、都市の全体像の仮説を提示することを目標とした。広大な面積をもった都市遺跡は中世に限らずいずれの時代においても、その全体を発掘調査によって完全に明らかにすることは至難といわな

くてはならない。このため従来の都市遺跡調査の大部分は調査地点の詳細は雄弁に語り得ても、都市の全体像の提示については寡黙であった。

しかし都市の全体像に象徴される、あらゆる出土遺構・遺物を検討する基盤となる都市空間の認識を欠いたまま個別地点の調査が行われるとすれば、その調査区の出土遺構・遺物の評価も単なる溝や建物など、考古学的に誤ったものではないにせよ、その情報量の大部分を読み込むことができないままに終了してしまう不十分なものになる。個別地点の調査、個々の建物、一見無意味にみえる溝を歴史を記述する資料として活かすためには、空間認識が不可欠なのである。

そこでまず、第1に詳細分布調査を行って、都市域の広がりや都市域内における利用の粗密と消長の概要を把握することとした。そして遺跡検討の基礎となる1/1000遺跡測量図を作成した。

こうした基礎作業を経て遺跡の基本層位や遺構の状況を把握し、都市を2分し、都市プランの基軸となったと考えられる土塁の構造と築造年代をつかむため、92年に土塁北側・土塁・土塁南側について試掘調査を行った。そしてこの成果を受けて、十三湊の土塁北側、南側を典型的に示すと考えられた2地点について、できうる限り広く面的な調査を行った。 (千田)

参考文献

- 宇野隆夫 1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集。
宇野隆夫 1994「日本海に見る中世の生産と流通」『中世都市十三湊と安藤氏』国立歴史民俗博物館。
東海埋蔵文化財研究会 1990『清須—織豊期の城と都市』。